

天台常行三昧と浄土教思想について

(特に日本天台を中心として)

土屋 正信

日本天台は中国天台を流伝したものであるが全く趣きを同じくしたものでなかつた。即ち中国天台は法華円教のみに立脚しているのに対して、日本天台は円密禅戒という四宗兼学の宗風を樹立した所に異にするものであり従つて四宗兼学の融合は叡山仏教の根本的立場であり、天台法華に於いて一乗開会を特色とし、三乗即一乗と談じたものを根本として四宗融合の調和を計る一大綜合仏教の樹立を志すものであつた。即ち守護国界章上の上(伝教大師全集一卷二二頁)に

夫、於一仏乗者。根本法華教。分別説三者。

隱密法華教。唯一仏乗者。顯説法華教。妙

法華之外。更無二句經。唯一乗之外。更無

餘乘。

といわれて以来この思想が終始叡山仏教を基調として、

叡山に於ける浄土教の興起を促す機運と成ることと推測する。

かかる宗風の中に於て浄土教思想に直因を投入したと思える常行三昧を窺うことにする。

常行三昧の伝播は伝教大師が中国天台より継いだものであり、般舟三昧經に依る実践法であつて、叡山に天台宗を開宗するや一宗の実踐行法として、山家学生式(伝教大師全集一卷四一頁)に於いて止観、遮那の二業を規定し修習せしめられたのであり、止観業は法華円教を中心に摩訶止観を、遮那業は密教を中心に大日經、金剛頂經、蘇悉地經は、所以円密一致の信条を実踐行法として取り上げたものである。従つて止観業を主眼とするのであつて、最澄が重視したと思えるのは止観(大正大藏經四六卷摩訶止観十四頁)に天台師所著という法華三昧の行法であるように思われる。続いて慈覚大師は入唐して五台山の念仏三昧法を伝え、常行三昧堂を建立し浄土教の宣揚に努め、これは法照禪師の浄土教であり山門堂舎記(群書類従第二四輯釈家部四七二頁)の慈覚大師伝の所で、

移五台山念仏三昧之法”。伝授諸弟子等。始修常行三昧。

とある如く、最澄と円仁の浄土教思想を比較すると、円仁の移植した法照流の念仏法は、最澄が伝えた常行三昧とは全く同じではなく、それが常行三昧に変わるものとして定立されたことは疑う余地がない。法照流の念仏法については望月信亨氏の著「浄土教の研究」(五九七頁)に詳略してあるのでここでは除く。従つて引声念仏の基となり不断念仏が盛行を極めて行く訳であり、止観の常行三昧と五台山念仏三昧との性質は一心三觀成就の爲の念仏であり、後者は阿弥陀の一經を中心としてそれが誦經行道と口称念仏とにより往生浄土を願求するものと思える。従つてこの五台山法照流念仏の移植は日本に於ける天台の浄土教興起の直因と云えよう。

次に常行三昧が四種三昧の中で浄土教思想が最も濃厚というべき所以を明確にする必要がある。常行三昧は基は般舟三昧經に依る実践法であつて、九十日間口に常に弥陀仏名を唱し、歩々声々念々唯阿弥陀仏に在つて休息することがない」ことによつて止観を成就する口称念

仏行であり、般舟三昧經に類似していると思われる所は行品第二(大正大藏經一三卷九〇五頁)に記載されており、又摩訶止観卷二上(大正大藏經四六卷一三頁)に於いて常行三昧の重要点を明確にしている。即ち

常行三昧。於諸功德最為第一。此三昧是諸仏母。仏眼仏父無生大悲母。一切諸如来從是二法生。

かくの如く四種三昧の中心を成すものと推測される。従つて弥陀念仏の概要を窺うことができるのであり、天台正依の經典である法華經の壽量品(大正大藏經九卷四三頁)と藥王菩薩本事品(同じく五四頁)と觀世音菩薩普門品(同じく五九頁)が浄土教的思想が窺えるのであつて、法華と念仏とが同体視され無二無別の關係が生じて来るのであつた。

かかる思想の普及は朝は法華懺法を修し、夕は弥陀念仏を行ずると云う「朝題目夕念仏」の傾向が漸次一般化し、日常勤行式が常則となり、鎌倉に於ける純正浄土宗の起源となり、弥陀念仏一門の興起を形成する過程を経る。

(未完)